

P-035

コロナ禍でのプレイリーダー（遊びのボランティア）による多様なニーズに合わせたアプローチ

本田 睦子、荻須 洋子、下村 美紀

認定 NPO 法人難病のこども支援全国ネットワーク

【背景】

病児にとっての遊びは、成長・発達に加え、治療や検査、制約の多い環境のもと苦痛や寂しさを軽減し、不足しがちな体験と社会性を促す機会となる。当会では子どもの心理や基礎的知識、障害や病状に応じて遊びの工夫ができるボランティア（プレイリーダー）を養成し、病院等へ派遣している。コロナ禍は自宅訪問の代替で、手作りおもちゃの発送や情報配信、WEB 訪問へ活動を変えたが、WEB 訪問は減少傾向がみられ、オンラインを苦手とする家族がいるなどの課題を感じていた。また、コロナ禍の制限で他者と交流する機会が減少していることから、児や家族の精神的影響も懸念されていた。

【目的】

遊びのボランティアの活動を通して、プレイリーダーと交流する機会を増やし、登録している親子が孤独にならず、より楽しい時間を過ごせるようにする。定期的な手作りおもちゃの発送や情報配信に加え、当団体の所有するおもちゃを希望者に無料で2週間貸し出す「おもちゃ宅配便」を開始した。毎回アンケートでおもちゃの感想を聞くようにし、一方的に送付するだけでなく、家族からも発信できるようにする。また、WEB 訪問の他に感染対策に講じながら自宅訪問を再開し、オンラインが苦手な家族も参加しやすいようにする。活動を広げることで多様なニーズに合わせ、交流できる機会を増やす。

【方法】

コロナ禍の活動で、活動の幅を広げる前（手作りおもちゃの発送や情報配信、WEB 訪問）と、後（おもちゃ宅配便や自宅訪問を加えた活動）で件数を比較する。及び、2022年度末に遊びの訪問登録家族あてに行なったアンケートや活動中の家族の声から、親子の気持ちに変化があったか検証する。

【結果】

活動件数については、活動の幅を広げた後の方が、活動件数が増加した。「おもちゃ宅配便」は定期的に依頼があり、アンケートは感想の他にもおもちゃのリクエストがあるなど、コミュニケーションにつながるきっかけになっている。また、WEB 訪問に参加していなかった既存の登録者から、自宅訪問の再開連絡に「待っていました」という声があり、訪問につながった。

【考察】

活動の幅を広げることで児や家族と交流する機会が増え、訪問時の他愛ない会話により孤立感を軽減し、精神的な安定につながったと考えられる。自宅訪問は試行錯誤しながらの再開のため、双方にとって安心して楽しい時間となるように、また自宅訪問が不安な家族への配慮も併せて、引き続き工夫を重ねて進めていきたい。

P-036

保育園、幼稚園、小学校により異なるアレルギー対応への小児科看護師が関わるアドレナリン自己注射薬の在宅自己注射指導の課題

高橋 美奈子¹、五十嵐 徹²、小見淵 友子¹、岡元 直子¹、佐藤 その子¹、山本 香絵¹、鈴木 彩海¹、竹下 輝²、上春 光司²、濱本 光²、栗原 茉杏²、宮田 真貴子²、田嶋 華子²、早川 潤²、右田 真²¹ 日本医科大学武蔵小杉病院 看護部² 日本医科大学武蔵小杉病院 小児科

【はじめに】

食物アレルギーは、食物によって引き起こされる抗原特異的な免疫学的機序を介して生体にとって不利益な症状が惹起される現象と定義される。不利益な症状には軽度なことからアナフィラキシーまでひきおこす可能性がある。経口免疫療法の開始時やアナフィラキシー歴、誤食に備えてアドレナリン自己注射薬（以下エピペン®）が処方される。小児科外来ではエピペン®の処方時に自己注射方法の指導を行うが、その際、子どもが所属する園や学校によってアレルギー児への対応が個々に異なることに気づかされた。

【方法】

チェックリストを作成し、子どもが所属する園や学校がアレルギー児にどのような対応をしているのか、保護者がどのようにアレルギーやエピペンが処方されたことを受け止めているのか明らかにし、今後の指導に生かすように後方視的研究を行った。

【結果】

対象は指導した27名、平均年齢4.6歳 男女比は8:2であった。アレルギーはナッツ類20、落花生5、卵・乳3、不明1であり、アナフィラキシー歴がある者は15例であった。全例がアレルギーについて園・学校にアレルギーの申請をし、生活管理指導表を提出していた。アレルギー面談をした者は22例であり、エピペンが処方されることを伝えていたのは10例、これから伝えるのが17例であった。エピペン®を預かる園・学校は2例であり、給食でのアレルギーの提供がないこと、エピペンを所持する子どもが多く、誤認のリスクがあるため預からない例が12例、各施設での昼食の提供は手作り弁当が4例、給食が23例で除去食に対応していた。

【考察】

半数以上の保護者はエピペン指導を受ける時点で園や学校には伝えていないことが明らかとなった。園や学校がエピペンを預からないことに保護者は理解を示し納得していた。しかし、万が一の対応を保護者が知っておくことは、安全な学校生活を送るうえで必要と考える。

病院から発行する生活管理指導表は、医師が具体的なアレルギー対応を記入した園・学校長あての公式な文書である。しかし、日常業務の中で看護師が生活管理指導表にかかわる機会が少ない。病院と園・学校の連携を考慮するうえで、看護師が補完して活動する機会を増やすためにも重要な情報の一つとして活用することが期待される。

【結論】

保護者には面談の機会を活用してエピペンが処方されることを学校に伝えること、積極的に園・学校とのかかわりを持つように助言することは看護師の重要な業務の一環といえる。